

被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
 幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
 被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット NEWS LETTER

第21号 2000年7月17日(月)

発行 歴史資料ネットワーク(神戸大学文学部内)
 TEL/FAX 078-803-5565

目		次	
大震災から六年目の夏を迎えて	奥村弘... 1	台湾921大地震の復興と	
被災史料再調査の概要	橋本唯子... 2	社区総体造営運動	藤田明良... 5
科研報告書の完成とネット		文献情報 7
活動報告書の編集作業	佐賀朝... 3	最近の動向から	
神戸の新しい歴史像を		震災資料所在調査について	佐々木和子... 8
- 兵庫津研究会の発足 -	藤田明良... 4	戦争史関連企画 8

大震災から六年目の夏を迎えて

歴史資料ネットワーク代表幹事 奥村 弘

阪神・淡路大震災から6年目の夏が来ました。にもかかわらず、大震災は現在も進行中です。火災が起きた神戸市長田区の現場は、被災一年目と変わらぬ空き地が、今も広がっています。再開発のプランはあるのですが、これが本当に可能かどうか、また住民のためになるのかどうか、議論は今なお続いています。また二重ローンで商店や自宅を再建した人々の背中にも、利子補給打ち切りが迫っており、大きな負担がかかろうとしています。

復興住宅に移り住んだ人達も大変な状況です。灘浜の復興住宅の高層ビル群は、公害裁判で厳しい指摘を受けた国道43号線のすぐそばにあります。神戸大学工学部の後藤さんの調査によるなら、転居後、高年令層を中心に喘息など体調をこわした人が増加しています。さらにビルの鉄の扉は、住民の共同性を破壊し、孤独死も続いています。

大規模災害が現代社会に与える、長期に渡る影響を目の当たりにしながら、歴史資料ネットワークは活動を続けています。現在、活動はおよそ五つの分野に分かれています。

第一は、五年間にわたる活動の総括を今年中の行うということです。史料ネットの総括というと、災害時の歴史資料保全を詳細に検討することで、次の災害時への対応のあり方について、実践的に深めるという点が注目を引きませんが、それとともに重要なことは、史料ネットの活動から、歴史や文化の領域が現代社会においていかなる意味を持つかという普遍的な課題を、深めていくことであると考えています。この七月に発行された『歴史学研究』738号には、このような観点から行われた昨年九月の歴史学研究会総合部会「市民社会における史料保存と歴史学 - 阪神・淡路大震災と歴史学 - 」の、馬場義弘氏、辻川敦氏と私の報告が掲載されています。総括の一環として載せられたもの(次頁につづく)

“史料ネット News Letter”購読と募金のお願い

史料ネットの活動に、平素からご協力いただき、ありがとうございます。
 引き続き、ご協力をお願いしています。“News Letter”は年4回発行、年間購読料(郵送費)500円にて受け付けています。下記支援募金口座に「ニュース郵送購読希望」と明記してお振り込みいただくか、あるいは電話、FAX、e-mailのいずれかの方法で史料ネットセンターまでお申し込みください。

史料ネット活動支援募金 (郵便振替)
 名義 阪神大震災対策歴史学会連絡会 口座番号 01090-7-23009

です。ご意見のほどよろしく申し上げます。

第二は、震災資料の収集保存や、亡くなった方のご家族への聞き取り活動への協力などを進めていく課題です。史料ネットは、自治体・各種団体のネットワーク化をはかり、この活動を積極的に進めてきました。その成果は阪神・淡路大震災記念協会の震災資料収集活動などに反映されており、さらにメモリアルセンターの建設も進められています。

第三は、歴史文化財の被災状況およびその後の過程についての検証を進める活動です。震災時の巡回調査活動は、緊急であることおよび被災者が居住地を離れていることが多かった時期でもあり、震災後の歴史文化財の被害と復興の過程での扱われ方について十分把握できたとはいえない状況があります。史料ネットでは活動の総括を進めるために、もう一度、被災地の被災史料の現在の状況をつかむため、試行的に、いくつかの地域の実態を調査し始めています。その中で、建物の公費解体の期間が短かったため、史料を廃棄せざるを得なかった現状などがあきらかになりつつあります。秋には、試行調査の検討を行い、さらに広い地域で検証作業を進めていきたいと思っています。

第四は、震災時保全した史料の整理活動です。とくに神戸大学に一時保管された史料については、仮整理が遅れています。第三の課題とあわせて進めていきたいと考えています。

第五は、被災地域を中心とする地域社会の歴史的解明を進め、その成果を市民に返していく活動です。これについては、八月十九日、第一回の兵庫津研究会を開催し、研究を本格的に進めていくことになりました。

課題は多いのですが、今、なによりもしっかりした総括活動を行うことが重要であると考えています。繰り返しになりますが、史料ネットの総括は、史料ネット内部のものだけではなく、現代日本社会における歴史文化、それに関わる学会や自治体、諸団体のあり方全体を考える際の素材の一つです。多くの方が総括作業に参加していただけるよう、活動のあり方を工夫していきたいと考えています。ご助言の程、よろしく申し上げます。

被災史料再調査の概要

橋本唯子

震災から5年が経過し、わたし達はこれまでのネットの活動を振り返ってみて、当初の保全・救済活動における被災史料巡回調査の再調査をおこなう必要性を再認識するに至りました。なぜならもともとネットの活動は、貴重な歴史資料の散逸を防ぐという緊急避難的な目的が第一だったからです。そのため、全域の調査をおこなったとはいえ不十分な箇所もありましたし、また5年の月日のなかで、既に調査済みのお宅における現況の把握も重要だろうと考えられました。

そんななかで、わたし達はこれからの再調査の方法を模索していくために、いくつかの地区をテストケースとしてピックアップすることに

しました。その第一弾として、神戸市文書館と協力し、神戸市長田区駒ヶ林地区を取り上げたのです。この地区はこれまでに中世史料も発見されていますし、古い家々がよく残っていて、さらにこの地の歴史に造詣が深い方がおられ、比較のご協力を得やすい地域でした。

そこで、当地区の自治会の方々にもご協力いただいて、2000年4月9日、当地区の歴史などについてお話を伺う機会に恵まれました。その場では積極的に当地区のいわゆる名望家などについての情報をお教えいただき、逆にわたし達のほうが戸惑ってしまうほどの盛会となりました。これも当地区の古い歴史と、それを誇りとされてきた住民の方々の熱い思いがあるが故

のことでしょう。

その時のお話に基づき、お名前の挙がったお宅へ、歴史資料の有無、調査へのご協力をお願いなどを伺うアンケートを送付させていただきました。そしてご返送いただいたお宅のうち、ご協力いただけるお宅と連絡を取り、7月9日に3軒のお宅を訪問しました。そのうち1軒のお宅からは明治期の講関係の史料などが発見され、また他のお宅からも、漁村としての当地区の営みを具体的にご教示いただきました。

この再調査をするにあたって、当初私は正直言って不安でした。震災から既に5年の時が流れています。被災直後に調査させていただいたとしても、あの時と同じように皆さんが温

かくご尽力くださるものなのだろうか？と。ところがこのように駒ヶ林地区においては、皆さんがこちらをリードしてくださるような積極的な対応をしてくださったのです。もちろん、今回はテストケース。むしろ例外的だと言えるかもしれません。けれど、もしそうだったとしても、私は今回の再調査を通じて、やはり地元に残る歴史と、それを誇りに思う人々の思いこそが、鮮やかな地域史の発掘に最も大切なものであると感じることができました。そういった意味で、私個人にとってもとても有意義な体験だったと思っています。

(はしもとゆいこ、神戸大学大学院)

科研報告書の完成と ネット活動報告書の編集作業

佐賀 朝

活動報告書の編集と総括作業は、今年も史料ネットの最重要課題の一つとして取り組んでいます。すでに今年3月には、報告書原稿がほぼ出揃ったのをうけ、各分野ごとの小括にあたる記述と、昨年9月に東京で行われた歴史学研究会総合部会における馬場義弘氏の報告を総論として加え、とりあえず、科研費に基づく共同研究(「被災史料保全活動からみた都市社会の歴史意識に関する研究」)の研究結果報告書(以下、科研報告書とする)としてまとめました(関係者のみの配布)。

現在、こうしてまとめた科研報告書をめぐって運営委員会の場で議論を行いながら、総括作業を進めています。5月・6月の運営委員会では、史料保存運動と行政との関係の結び方、ボランティアとしての被災史料救出活動の意義、ネットの組織体制の変遷とその特徴・問題点、史料ネットの組織の性格と今後の方向性などについて議論がなされました。特に、これまでの史料保存運動の到達点との関係で史料ネットの活動にはどのような新しさと意義があるのか、その上で今後のネットの方向性はどうか、という点が、全体を通じた中心的論点にな

ってきています。7月の運営委員会では、そうした今後の方向性をめぐっての議論を本格的に行う予定です。

さて、史料ネットの活動報告書については、今回、一応のまとめとして作成した科研報告書をベースにしながらも、活動全体の流れをおさえる形で被災史料救出活動について総合的に叙述する総括編を加えるとともに、活動に関わる各種資料・記録や写真なども盛り込んだ本格的なものを企画しています。現在、出版の可能性も検討しながら、上に述べた運営委員会などでの総括の議論もふまえて、総括編と各種記録の作成・編集作業にあたっています。今年の秋ごろを目標に、総括編の骨格をまとめ、年内には活動報告書の構成と主要部分が完成できるよう、編集担当者グループを中心に作業を進めていきます。

昨年同様、そうした総括をめぐり議論を紹介する機会を持ち、NEWSレター読者の皆さんをはじめ、さまざまな方々からの意見も参考にしていきたいと考えていますので、ご協力をお願いします。

(さがあした、桃山学院大学講師)

神戸の新しい歴史像を - 兵庫津研究会の発足 -

藤田明良

震災以後、被災地では地域再生への取り組みのなかで、地域史に対する関心が高まり、また復興事業にともなう発掘調査で、新しい発見が続出しています。このような動向を支援するため、史料ネットでも、市民講座や遺跡見学会などを催してきました。特に震災復興のなかでその歴史像が大きく問われている神戸については昨年以來、『歴史のなかの神戸と平家 - 地域再生へのメッセージ -』（神戸新聞総合出版センター）の発刊、連続市民学習会「よみがえる兵庫津の歴史と街並」の開催など、集中した取り組みをおこなってきました。

一方そのなかで、新しい視点や成果をいかして、総合的な神戸の地域史像を提示するには、これまでの研究成果の整理や、実証研究の蓄積が、さらに必要なことも判ってきました。そこで兵庫津を一つの核として、この地域の歴史を再検討、再構築する研究会を発足したいと思えます。中世を例に検討対象を列挙すれば、古環境（温暖化や寒冷化、入海と砂州、湊川の流路、地震・津波・火災などの災害など）、都市景観（港、官衙、大道と辻子、西国街道、湊川宿、都賀堤、寺院配置、絵巻物や絵図の検討

など）、支配と住民（領有関係、神人供御人、幕府と守護、住民組織、自治と門閥、課役と負担など）、宗教施設（神社＝敏馬・生田・長田・和田・三石・七宮、仏寺＝顕密・修験・浄土宗・時宗・律宗・禅宗、キリシタンなど）、海の世界（港・水運・物流ネットワーク、関所・船の支配（船籍）、海賊と水軍など）、国政と戦争（兵庫の由来、治承寿永、蒙古、悪党、南北朝、応仁、戦国、「天下統一」、王権の交通支配、外交、天皇将軍の来訪など）、伝承（神功皇后、平家、太平記の後醍醐・湊川・楠公、地域伝承など）、産業と特産品（魚住窯、御影石、味噌・醤油、酒、船具など）等があげられます。

当面（一年半くらい）は、研究史の整理や実証研究の成果を当該分野の専門家に報告してもらう形で研究的蓄積をおこない、その後、歴史像を共有し地域再生に活用していくような市民との連携という新しい展開を考えたいと思えます。別記のように第1回を開催しますので、多くの方々の参加を訴えます。

（ふじたあきよし、天理大学助教授、史料ネット事務局長）

第1回兵庫津研究会

日時：8月19日（土）13：00 - 17：00

会場：兵庫勤労市民センター（JR兵庫駅北東、徒歩3分）

報告：「中世兵庫津研究の成果と課題」藤田明良（天理大学）

「埋蔵文化財調査の軌跡と成果」岡田章一（兵庫県教委）

「『入船納帳』研究の成果と課題」藤田裕嗣（神戸大学）

*タイトルは予定 司会：市沢哲（神戸大学）

連絡・問合せ先 歴史資料ネットワーク（神戸大学文学部内）

yfujita@lit.kobe-u.ac.jp 電話・ファクス 078-803-5565

（参加される方は、上記までメールか電話・ファクスでお知らせください）

台湾921大地震の復興と社区総体营造運動

藤田明良

今年3月、台湾を訪問した。中国文化大学（勤務先の交流協定校）主催の学術シンポジウムで、阪神・淡路大震災における文化遺産の救出保全活動について報告するのが主目的だが、報告に先立つ3月18・19日の両日、被災地の南投県に入った。台湾921大地震の被災文化遺産の復旧状況、および復興街づくりにおける歴史的環境の位置付けについての調査をおこなうためである。前者は、昨年10月の奥村弘氏（史料ネット代表幹事）等の被災地訪問の追跡調査でもある（奥村弘「台湾大地震被災文化財保全の状況についての現地レポート」『史料ネット News Letter』No. 19）。

18日朝、台中市で、前回の調査にも同行された東海大学の劉超さんと林珠雪さんと合流し、車で南投県に向かう。行き先は奥村氏も訪れた霧峰郷の林家邸宅址である。台湾屈指の旧家である林家の邸宅群は、近年、古蹟文物（文化財）に指定され、数期にわたる復元工事が計画された。そして、母屋を中心とした最も古い建物群を対象にした第1期復元工事は、99年夏に完成したが、その直後に大地震に見舞われ、建物群は全壊し復旧の見通しもたっていなかった（前掲、奥村レポート参照）。それから5ヶ月経過した今回の訪問でも、全壊した建物はそのまま、まわりを盗難防止用のフェンスによって囲まれていた。劉さんの話では激しい議論の末、政府レベルでは、修復する方針が決まったという。フェンスの中ではちょうど、部材を保存するための巨大な収蔵庫が建設中であった。この建物群から少し離れた学校の中に林家の「花園（庭園）」がある。その施設は復元第2期工事の対象になっており、こちらは大地震以前に予算がついていたので、ちょうど工事が始まっていた。解体中の建物などは、日本統治時代に改修されているので、中国の伝統工法と日本の技術が複合している様子が良くわかった。

このような歴史的建造物は、この地方にかなり残っていたが、このように震災被害から復旧の見込みがたっているのは、この林家などごく

一部で、解体撤去が決まっているものも多いという。ただ、まだ方針が決まっていないものも少なくなく、出来るだけ修復保存を目指したいと劉先生はいつている。この後、県の文物管理委員会を訪れたが、「大統領選挙（総統と呼ぶのは日本のマスコミだけである）」当日で休みであった。

今回の南投県の調査の、もう一つの目的は、台湾の復興街づくりのシステムについてである。台湾に出発する直前、日本の新聞に、2月に台中であった震災復興と街の景観のシンポジウムに関する記事が載った（角谷陽子「震災復興ボトムアップで - 台湾の街づくりに学べ - 」『朝日新聞』（大阪本社版）2000年3月12日）。そこには、地域の歴史的文化的特色を復興に活かそうという台湾の「社区再建」の活動が紹介されていた。台湾の復興計画は、「公共建設」「産業復興」「生活再建」とともに「社区の再建」を四本柱にあげている。「社区」は日本の市、町に相当する郷や鎮内部の小さな地区で、ここを単位に住民と研究者（プランナー）とが協力して作成した復興計画を作成し、行政が取りまとめる。このような住民の発案を積み上げていくシステムを、記事ではボトムアップと評価し、日本における行政主導のトップダウン方式と対比させたのである。

記事ではさらに、台湾では1980年代後半から、歴史を通して郷土意識を高め、住環境やコミュニティ意識の改善に取り組む住民参加型の活動が各地で現れ、研究者の側でも「社区营造学会」が誕生、行政側も文化建設委員会（文部省）が94年に「社区総体营造運動」を提案、地域の文化や歴史をいかした住環境整備などを進めたことが述べられている。大地震以前からのこのような動向が、復興事業のなかにも位置づけられたのである。神戸などでも震災直後には、被災地の住民たちの間に、足元の歴史を見なおそうという動きが起こった。被災経験のなかで地域住民としてのアイデンティティやコミュニティの問題が、あらためて認識されるようにな

り、その一環として地域の記憶や歴史が注目されるようになった。史料ネットが主催・協力した救出史料の展示会や学習会には、予想を上回る大勢の市民が詰めかけていた。また住民の協議会が作成した「街づくり憲章」の中にも、地域の歴史と文化の継承を提唱するものもあった。だが、広い道路網と高層ビル群などの土地の「高度利用」を基本とする既定の都市計画を上から推進する行政の姿勢の前に、このような市民本位の街づくり運動は、断絶してしまった場合が少なくない。

今回は、南投県山間部の盆地に位置する埔里の町を訪れた。かつて農林加工業で栄えたこの町は近年、地勢に制約され停滞していたが、自然と伝統文化の豊かさをいかした「町おこし」で、1980年代から息を吹き返した、「社区総体营造運動」の先駆的な存在として知られている。その中心にたった町の文化的リーダーの一人、鄧相揚さんを、大学の同僚の下村作次郎さんに紹介してもらっていた。原住民族の研究でも知られる鄧さんは、1917年に創建された埔里酒廠や、観光農園、製紙工場、公園、旧家などを案内しながら、伝統文化の保存と、それを活かした産業・観光振興の取り組み、そして今回の大地震による被害について語ってくれた。紹興酒の里として知られるこの町のシンボリック存在だった酒廠（酒造工場）は、地震で損壊した後、近日さらに火災に遭うという二重の被害を受けたが、日本統治時代の建築部分は無事なようだった。歴史的建造物として整備されていた清代の地主の居館も、部分的な損壊はあるものの、幸い倒壊はしていなかった。だが寺院や媽祖廟などはダメージが大きく、完全に建てなおさなければならない。震災後には社区营造学会会長の李遠哲氏（ノーベル化学賞受賞者、前中央研究院長）も、視察と激励にこの町を訪れ、町の総体復興について現在、議論が重ねられているという。

また幸いにも調査中に、震源地に近い南投県集集鎮内の一社区を対象とした、震災復興・社区総体营造・再建調査計画に関する中間報告書を、入手することが出来た（『南投縣921災後重建 社區總體營造集集鎮田寮里示範村重建調查規劃《期中報告》』委託単位：南投県政府、規劃単位：中華民國戶外遊憩学会、2000年3月）。出来あがったばかりの報告書によれば、

そこは、戸数503戸、人口1,591人の、集集鎮内の田寮里である。報告書は、計画の背景と目標、社区の現況、再建課題の分析、再建計画構想の4章からなるが、第4章「再建規劃構想」の冒頭に掲げる4ヶ条の基本原則の2番目に、「住民文化」を重視し地区の「人文特色」を保存すること、すなわち社区固有の文化と歴史的環境の重視が、うたわれている。具体的には1922年に建てられた竜泉駅舎や、150年前に現在位置に移った竜泉宮などの歴史的建造物と、豊かな自然環境をいかし、家の形や色彩、建築資材なども景観にマッチさせるようなプランがしめされている。

この報告書は、専門家である戶外遊憩学会のメンバーが、地元の住民や再建推進委員会（地元の名士や自治会長から構成されている）と協議しながらまとめ、委託元の南投県に提出したものである。報告書には今年1月20日に開かれた住民との「座談会」と、1月20日と3月8日の再建推進委員会との「座談会」の記録も乗っており、住民と専門家との活発なやり取りの様子が伺える。これを見ると、「再建しなければならない家と修理で済む家はどのように区別するのか」、「計画では居住区に民家を集めているが、多くの人が同じ区域にすむと問題が多くなり解決が難しくなる」など、住民からの意見の中には、「総体营造計画」に対する不安や異論も多く出されている。

前述の新聞記事でも、専門家が地元の意見を聞いてくれない、住民には社区营造という考え方を理解できない人も多い、計画を実施する人材や資金が不足しているなど、シンポジウムの参加者から戸惑いの声が出ていたことが紹介され、住民が自治体や専門家に依存しすぎ、専門家の経験不足、計画期限が3月末まで余裕が無い、という専門家の指摘に触れている。先述した林家邸宅群のある霧峰でも、専門家からは、邸宅の周辺地区も歴史的景観を復元しようという意見もあるが、住民や地権者の利害状況が複雑で、同意を得るのはかなり難しいという話を、東海大学の劉さんから聞いた。このように台湾の「社区総体营造運動」をとりいれた被災地復興・街づくりも、直面する問題が多く、必ずしもうまくいっているわけではない。

だが神戸市など、阪神淡路大震災と復興計画と比較すると、評価すべき点として少なくとも

次の2つが指摘できるだろう。第一に、行政のスタンスの相違である。新聞記事でも指摘されていたが、日本では行政が策定した計画を、住民におろすだけで協議はしないという姿勢が目立った。コミュニティの再生を目指した住民側の街づくり協議会が、それへの対応を巡って受入れと拒否に二分され、街では会話も出来なくなった地区もある。

第二に、歴史性や伝統文化を含めた地域の個性への姿勢である。神戸市などの計画は、効率を優先させた画一的なもので、その地区の歴史や文化を重視するという視点は、観光資源という点を除けば、ほとんど無かった。現在、JR線の駅前などに完成しつつある新しい街並をみると場所が違って、何処も同じような景観が展開している。もちろん、阪神淡路大震災の被害が都市部に集中しているのに対し、台湾921大地震の被災地は、郊外が多いという相違もあるだろう。だが、以上の2点はいずれも、そのような「場」の性格とは次元を別にする問題

である。神戸が20世紀型の経済効率優先の発想を引きずっているのに対し、台湾の試みは、調和を重視した21世紀の住環境整備を展望しているというのは、言い過ぎだろうか。

2日間の駆け足調査を終えて台北に戻り、報告に上述したような街づくりの問題を急きよ追加して、シンポジウムに臨んだ。筆者の報告の討論では、台湾と日本の復興のあり方の比較や、伝統的街並と危機管理の整合性などが議論になったが、市民と研究者と行政の認識を一致させることの重要性が、参加者の間で確認された。ともあれ、台湾の921大地震からはまだ半年しかたっていない。彼の地での復興に関する試みが実を結ぶのは、まだ先のことである。大統領選挙と偶然重なった今回の調査だが、新しい体制を選択した台湾の人々の街づくりが、今後どのように進んでいくのか、日本から見守っていきいたいと思う。

(ふじたあきよし、天理大学国際文化学部助教授、史料ネット事務局長)

文献情報

書名	著者名	発行年	発行所
阪神・淡路大震災年の記録 公共・大学図書館、専門機関、関連団体施設へのアンケート調査報告書	震災記録を残すライブラリアン・ネットワーク	2000/01/17	震災記録を残すライブラリアン・ネットワーク
震災から5年 阪神間ミュージアムネットワーク震災復興報告書	阪神間ミュージアムネットワーク推進実行委員会	2000/03	阪神間ミュージアムネットワーク推進実行委員会

論文等表題	筆者(著者)	誌名(書名)	巻号	発行年月日
台湾での大地震と文化財保全 現地レポートと神戸大学でのシンポから	奥村弘	『神戸大学史学年報』	15	2000/05/24
史料ネットのウェブページ作成に関する覚書(その)	松下正和	『神戸大学史学年報』	15	2000/05/24
(新刊紹介)歴史資料ネットワーク編「歴史のなかの神戸と平家 地域再生へのメッセージ」	森田竜雄	『神戸大学史学年報』	15	2000/05/24
阪神・淡路大震災から年 近畿部会・防災委員会共催でアーカイブセミナーを開催	全史料協近畿部会・防災委員会	『全国歴史資料保存利用機関連絡協議会会報』	51	2000/03/31
震災と歴史学徒 1995-2000	寺田匡宏	『歴史科学』	161	2000/06/10
市民社会における史料保存と歴史学 - 阪神・淡路大震災と歴史学 -	馬場義弘 奥村弘 辻川敦	『歴史学研究』	738	2000/7/15

最近の動向から

震災資料所在調査について 財) 阪神・淡路大震災記念協会 佐々木和子

2000年6月から2002年3月にかけて、兵庫県は阪神・淡路大震災記念協会とともに、労働省の緊急地域雇用特別交付金を使い、大規模な資料所在調査をおこなうことになった。各年度前後期2期ずつ計4期にわけられた期間中、各期110人総勢440人の調査員が、県内の被災10市10町をまわって訪問調査をおこなう。

調査対象は、地域の被災者(小学校区単位で抽出)、復興公営住宅居住者といった個人単位のもの、NPO・ボランティア団体、まちづくり協議会、主要事業所、団体・組合、小中学校(教育機関)といった団体単位と組み合わせており、幅広い。

この事業は、資料の収集よりも所在調査に重点をおいたことに特長がある。収集は、あくまでも所在調査の副産物と位置づけられた。また、集められた資料に関する情報はデータベースに蓄積し、今後の活用に道を開くことになっている。

現在調査員たちは、各区市のボランティアセンターや県民ネットのリストなどを参考にしながら、ボランティア団体への訪問の準備をすすめている。準備の過程で、訪問対象となる震災ボランティアの把握が非常に困難であることがわかった。震災時のボランティア団体は、5年余の月日を経て、すでに活動を終えていたり、活動内容を大きく変えているところがほとんどである。訪問リスト作成そのものも調査の一環とし、訪問先での情報や収集資料の中からさらにリストに追加していく予定である。

震災から5年半を経て、大規模な資料所在調査をおこなうことになった。この間、台湾、トルコでの地震や有珠山、三宅島での噴火など、さまざまところで大きな災害が相次いでおこっている。阪神・淡路地域での経験を生かす必要性は、ますます高まってきている。今後この調査の成果をどのように活用し、発信していくか、われわれに課せられた課題は多い。

戦争史関連企画 戦争の歴史をたどる見学会 火垂るの墓を歩く

日時 2000年8月9日(水)午後1時30分～4時30分頃

コース 阪神香炉園駅南側改札口集合 夙川沿い 甲陽学院中学校 回生病院・香炉園浜

お話 中田政子さん(神戸空襲を記録する会)

参加費 200円(資料代) 定員50人 申込み方法 歴史資料ネットワークまで

主催 『火垂るの墓』を歩く実行委員会 / 協力 史料ネット・甲陽学院中学校(会場提供)
空襲・戦災を記録する会 第30回全国連絡会議神戸大会

日時 2000年7月29日(土)・30日(日) 場所 神戸市立中央小学校

基調講演 戦災と震災からの復興について 室崎益輝氏(神戸大学教授)

報告とパネルディスカッション・「戦災と震災」関連パネル展示

参加料 無料(資料代のみ実費をいただきます)

主催・申込み先 神戸空襲を記録する会(TEL・FAX078-642-2518、中田)

このニュースは、NIFTY-Serveの歴史フォーラム・歴史館2番会議室「地域史情報室」に、“曾根崎新地のひろ”さんに転載していただいています。史料保存関係のホームページ「Archivist in Japan」を開設している小林年春さんのご協力により、史料ネットの情報を同ホームページに掲載していただいています。
<http://www.archivists.com/> または <http://member.nifty.ne.jp/archivists/>
または <http://www.asahi-net.or.jp/~hm7t-kbys/archivists/>

史料ネット NEWS LETTER No. 21 2000.7.17(月) 編集・発行 歴史資料ネットワーク 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 神戸大学文学部内 TEL/FAX078-803-5565 e-mail yfujita@lit.kobe-u.ac.jp
